## 真 を める者、ウマル(2/3): 共同体への尽力

:

明:ウマルによる、イスラムの同胞。

目: 事言者ムハンマド彼の教友たちの物

より: ア イシャ ステイシ

E25 Feb 2013

集日 25 Feb 2013

ウマル ブン アル=ハッタ ブは 固かつ自己主 の い男で、 去にその心はイスラ ムへの憎 で燃え上がっていました。 言者ムハンマド(神の慈悲と祝福あれ)による神への と、クルア ンの なる美しさは、彼のすべてを えました。ウマルがイスラ ムを受け入れると、彼はムスリムとしてムハンマドのウンマに奉仕し、ウンマが喜ぶことを喜び、ウンマが悲しむことを悲しむようになったのです。

ウンマとはアラビア で「共同体」を意味する言 ですが、他のアラビア の と同 、完全に 日本 に すことは出来ません。アラビア のウンマの 根は「アンマ」であり、それは「行 く」または「 に行く」を意味します。「イマ マ」とは くことを意味し、例えば礼 の は 「イマ ム」と呼ばれます。おなじ 根による に、母 源泉 起源を意味する「ウンム」があ ります。

ウンマとは、神の崇といった一つの目的によって した信仰者たちによる共同体を意味 します。 した彼らはく、分裂した彼らは弱いのです。ウンマの一はそれぞれが精神的 に一され、それは物理的にも示する程です。ウンマの一部が痛むと、ウンマ全体が痛 むのです1。

このことの例として、ムスリムたちが い 国に住む同胞たちに する虐待や抑 へ避 しているのをテレビなどで目にする 合の反 が げられます。ムハンマドのウンマにおいて、もしその一 が つけられていたのなら、他の全 にとってもその痛みは本物なのです。ムスリムは 理的に正しいことに立ち上がり、非人道的なことはイスラ ムとは なものです。ウマル ブン アル=ハッタ ブはこの独自の特 をすぐに解し、自らをウンマの一 として宣言したのです。

ウマル ブン アル=ハッタ ブがイスラ ムを受け入れたとき、彼はこの共同体の一 となることを望み、そのことを高らかに宣言しました。ウマルは喜びの中にあっても、悲しみの中にあってもこの共同体の一 となることを めたのです。彼の改宗の 、ウンマの中の弱き人々が 的な虐待と抑 を被っていましたが、彼はその苦しみを理解するようになり、また彼自身も 去にそれを行っていた事により、自らもそれを することを望みました。ウマルは彼のイスラ ムへの改宗が 付かれないものとすることを望まず、ただちにイスラ ムの に してそのことを公言しました。

当初、イスラ ムに改宗していなかったマッカの人々はウマルの改宗に してショックを受け、すぐには反 しようとしませんでしたが、その噂は まり、彼らは神の へと向かってウマルを しました。 大で筋肉 な勇士である彼は、 者たちの真ん中に座り み、その攻に甘んじました。ウマルの心はイスラ ムの同胞に する 情で溢れていました。 言者ムハンマドはこう言っています。「 に私の に 言者が出 したとすれば、それはウマル ブン アル=ハッタ ブだっただろう。」

## 力よりも大きなもの

ウマルはアブ バクル アッ=スィッディ クと共に、 言者ムハンマドに最も近かった教友でした。アリ ブン アビ タ リブが えるところによると、 言者ムハンマドは、朝にアブ バクルとウマルを えて出 し、夜も同 に二人を えて ってきたということです。 言者自身、彼ら二人を自らの目と耳であるとし、二人を「地球の住民における忠言者2

」であるとしています。ウマルは、ムスリムのウンマにおける危 と のすべてにおいて 、 言者ムハンマドの に立っていました。 マッカのムスリムたちがマディ ナへと移住した 、彼らは皆、 画に基づいた密かなる旅立ちをしましたが、ウマルだけは例外でした。彼は堂々と移住した唯一のムスリムで、事 、彼は出 を宣言し、彼を阻むことの出来る屈 な挑 者はいないのかと求めた程でした。ウマルは自分の首の周りで を振り回し、憎 の消え、神そして 言者ムハンマドとその同胞への 情によって ち溢れた胸を り、マッカの通りを したのです。 言者ムハンマドがウンマを作り出し、ウマルは彼の に立ったのです。

その比 なき さによって されてはいますが、彼は敬虔さと 切さにおいても卓越していました。彼は夜 を崇 で ごし、たびたび夜も深まった に家族を起こして崇 に加わるよう促していました。彼は 烈な信仰者であり、神による の 束を信 し、神のために信仰者たちを益そうと自らの富を やしていました。 言者ムハンマドの教友の一人の える 承によると、ある ウマルは22,000ディルハムを困 者のために分配し、砂糖の入った袋を配布することも としていました。なぜ砂糖を配布するのかと ねられたとき、ウマルはこう述べています。「なぜなら私はそれをこよなく し、神もこのように仰せられているからだ。」

ウマルは、 言者ムハンマドにより に入るという吉 をもたらされた10人の内の十人 でした。しかし、そのことは彼が人生を通して神のご 悦を得ようと努力することを怠らせませんでした。彼は知 の人でもあり、またその 切さと神への崇 のための不断の献身だけでなく、ムハンマドのウンマに尽くす人物でもあったのです。 言者ムハンマドは、私たち全 にこのように告げています。「人は、自らに望むものを同胞に しても同じく望むようにならない限り、真の信仰者とは言えない。6」

ウマルは を望みましたが、彼は唯一なる真の神以外に神はなく、ムハンマドはその使徒であると信じた老若男女全てにもそれを望みました。これが、真を めた男、共同体のために尽くす男であるウマルだったのです。

Footnotes:

- $\frac{1}{}$  サヒ フ ブハ リ 、サヒ ム ムスリム
- 2 アッ=ティルミズィ
- 3 イブン カスィ ル著の「正 カリフ 」より
- 4 アッ=ティルミズィ
- 6 サヒ フ ブハ リ 、サヒ ム ムスリム等

## この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2134

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。